Chapter1 Education as a Necessity of Life

Chapter2 Education as a Social Function

Chapter3 Education as Direction

発表日：10月7日

担当：青山、上野、岡野、勝呂、田代、寺澤

【本章の流れ】

Chapter1 Education as a Necessity of Life 生命に必要なものとしての教育

1. Renewal of Life by transmission伝達による生命の更新

2. Education and Communication 教育とコミュニケーション

3. The Place of Formal Education制度的な教育の場所

Chapter2 Education as a Social Function

1. The Nature and Meaning of Environment　環境の持つ性質や意味

2. The Social Environment　社会的な環境

3. The Social Medium as Educative　教育的な社会的生活環境

4. The School as a Special Environment　特別な環境としての学校

Chapter3 Education as Direction 指導としての教育

1. The Environment as Direction指導的なものとしての環境

2. Modes of Social Direction社会的指導の諸形式

3．Imitation and Social Psychology 模倣と社会心理学

4．Some Application to Education 教育への適用

■Chapter1 Education as a Necessity of Life　生命に必要なものとしての教育　　　 （pp1-6）

担当：上野

1. Renewal of Life by transmission伝達による生命の更新

◆無生物と違い、生物は自らを持続させる為に、自身に危害を与えるかもしれないエネルギーをコントロールする。生存（life)とは、環境において、行動の連鎖により、自己を刷新し、維持していくプロセスである。

しかし、高等生物は死ぬため、このプロセスが無期限に続くわけではない。

他の生命の形態（個体や種）を再生産することが連続して続く。生命の連続とは、生物の必要に環境を持続的に適応させていくことである。

◆人生（life）とは個体や民族の経験の全てを示し、習慣、制度、進行、勝利と敗北、休養と仕事を含む。

経験も同じように用いられ、生命の連続の原理が当てはまる。

教育は広い意味において、生命の連続の手段である。

◆社会的な集団を構成するそれぞれのメンバーの誕生と死去という事実が教育を必要とする。

文明の進化とともに、未熟者のもともとの能力と、成熟者の規範や慣習との溝は深くなる。その溝を埋められるのは教育だけである。伝達のプロセスを経て、社会は存在する。しかし、その伝達による社会の再生は自動的でなく、努力されなくてはならない。

2. Education and Communication 教育とコミュニケーション

◆社会は伝達、コミュニケーションによって存在し続けるのではなく、伝達、コミュニケーションの中で存在していると言える。

・共同体や社会を創るために彼らが共通にもっていなくてはいけないのは、目標、心情、熱望、知識等の社会学者には心だてと呼ばれる共通の理解である。共通の理解に参加することを保証するコミュニケーションは、期待や条件にこたえる方法のように、類似した感情的で知的な性質を守る。

・人々は身体的近接に住んでいることで社会になるわけではない。共通の目的を認識し、それに関心を持っており、それを見据え、特定の活動を統制するとき、彼らは共同体を形成する。

・最も社会的な集団の中にも、社会的でないところがあることを認識しなくてはならない。個人は望みの結果を得るために、感情的で知的な性質や、同意について考えることなく、他人を利用する。命令を与え、与えられることは行動や結果を変えるものの、目的の共有や関心のコミュニケーションには影響しない。

担当：寺澤

◆あらゆるコミュニケーションは教育は教育的である。

→コミュニケーションをするということは、拡大し変化した経験を得ることでもある。そして、それによりその人自身の態度も変化する。

◆コミュニケーションをした方もまた影響を受ける。

　→経験を正確かつ十分に他人に伝えようとすると、経験とまた違った態度で向き合わなくてはならなくなる。

◆経験は、コミュニケーションのためには体系化されていなければならない。つまり、その経験が相手の人生にどのような意味があるか相手がわかるようにしておかなければならない。

◆コミュニケーションは芸術に似ている。

　→正確に伝達され、活発に共有されている時に、教育的となる。

3. The Place of Formal Education制度的な教育の場所

◆他人と生活する中で受ける教育と、計画的に若者を教育することとの間には、真に生活する限り、大きな違いがある。

　→しかし、教育的であることは共同生活の理由ではない。

　→それは副産物であるが、注目されていない。

◆しかし、若者にとって、直接的な事実としての共同生活という事実そのものは、重要である。

　→子供は訓練の必要が明白なのである。

　　→つまり、彼らの態度と習慣を変えるという圧力は緊急であるからだ。若者が共同生活に参加できるようにするため、能力を彼らが持っているか考えざるをえないのである。

◆広い教育過程の中で、私たちは学校教育などの制度的な教育を見いださざるをえない。

　→未開な社会では、共同生活で必要なことを教え込むが、文明が進歩すると若者と大人との間の能力差が拡大するので、このような直接的な方法は難しくなる。

　→そして、事前的な訓練に頼るようになる。そして、意図的な機関、つまり学校と学科が生み出されるのである。

◆このような制度的な教育がなければ、複雑な社会のすべての資源と経験を伝達することは不可能である。そのような制度は若者が不可能であるような経験を利用する道を開いたのだ。

◆しかし、間接的な教育からこのような直接的な教育への移行には大きな危険がある。

→制度的な教授は抽象的なものとなりやすい。知識は現実にうつされて存在しているからである。

◆進歩した文明では、学ばれるべきことは、到底身近な行動や物に置き換えることができないような、記号の形で蓄積されている。

　→そのような教材は、思考や表現の普段の習慣の中ではなく、独立の世界に存在しているのである。

　→制度的な教授は、現実から離れた死んだものになりやすい危険があるのである。

◆教育哲学が取り組まなければならない最も重要な問題の一つは、制度的な教育と非制度的な教育、直接的な教育と付随的な教育との適切なバランスをとることである。

　→自覚的に知っている事柄と、自覚しないで知っている事柄との分裂を回避することは、ますます難しいこととなってきている。

■Chapter2 Education as a Social Function社会的機能としての教育 （pp.6-14）

担当：岡野

1. The Nature and Meaning of Environment　環境の持つ性質や意味

共同体や社会の集団は常に再構成されていて、集団のにおける子供が教育を受け、成長することによってその再構成が起こる。

教育という単語に繋がる様々な単語が存在するが、これらの言葉は、教育の過程の一つであり、その段階によって言い方が異なっているだけなのだ。その結果、「教育」という言葉は、導き、育てることの過程を表す単語に過ぎないのである。

身体で表現できるものは継承することが容易であるが、内的な部分はどのようにして継承されうるのだろうかということが問題となる。直接的に伝えるのではなく、子供は大人の考えをいかに理解するか、大人は子供に押し付けずにいかに理解させるかが重要になる。

★ここで、社会の果たす役割がある

社会の果たす重要な役割…

次第に個人に周りの行動様式を理解させること

生きた環境によってまた新しい環境を作っていくこと

2. The Social Environment　社会的な環境

他者と交わる活動をしているものは、社会的な環境を有している。

個人のやることや出来ることは他者の期待や要求、承認、非難によるものであり、他者とつながっている者は他者の活動を考慮に入れないことには何も出来ない。

個人は社会において他者と結びついているため、集団の考えがだんだん自分の考えと似たようなものになり、そうした影響によって、子供は社会の中で社会化されていく。

3. The Social Medium as Educative　教育的な社会的生活環境

社会の集団はそもそも教育的であり、参加は生きていく為には不可欠である。

その社会には設定された目標があり、それは無意識的にも子供に影響を与える。

子供の生きる社会が複雑になればなるほど、子供の能力を伸ばすためには３つの要件を満たす社会的な環境が必要となる。

それは、

①成長に望まれる傾向の要因を単純化し、秩序付けること

②社会的な慣習を純粋化し、理想化すること

③普段から影響を受けやすい環境よりも、より幅広く、バランスのとれた環境を作ること

4. The School as a Special Environment　特別な環境としての学校　担当：勝呂

学校は、直接的にではなく、間接的に子供を教育することができる。

学校での繋がりの持つ機能が特別に３つあり、それは以下のようなものである。

①現代の社会的な生活において、繋がりというものは非常に複雑で数多く存在しすぎるため、その多くの中から、子供が所属するのが最も好ましい環境を選ぶことが難しいが、学校はその環境の役割を果たしてくれている。

②選別機能を持ち、精神的な部分で影響を及ぼしうる、子供の環境に望ましいものを選び抜いてくれている。

③社会の環境における様々な要素のなかでの調整機能があり、生まれた場所による社会的集団の限界を超える機会を各々に与え、より広い世界を知ることができる。

■Chapter3 Education as Directive 指導としての教育　　　　　　　　　　　　　　　(p.14-24)

担当：田代

1. The Environment as Direction指導的なものとしての環境

◆教育の一般的機能のうちのいくつか→指導（direction）、統制（control）、補導(guidance)

補導…補導される個人の生まれつきの共同作業を通して助けること

統制…他人が導いたときにもたらされると同じくらい彼（個人）の努力を通して得られる規制も含む

指導…同時的であると同時に、継続的でもある。

上記の一般的論述から２つのことがわかる

① 完全な外的の指導は不可能である。結局は、子供たち自身が自分の行動を決断するからだ。

② 文化や規制からの統制は、近視眼的になりうる。目前の結果を達成するかもしれないが、その個人のその後の行動に悪い方向で影響を与える犠牲もともなう

2. Modes of Social Direction社会的指導の諸形式

１． 他人に直接的な行動をとる際、物理的結果と教育的結果と混同すると、彼の望んでいる結果を得ようとする性質をつぶしてし、本来の彼の発達を妨げ、正しい方向へ進めなくする。そのため、直接的な行動は、衝動的なために彼が自分の結果を予知できない場合のみである。

２． 他の指導の方法として、個人が生活しているまさに社会環境の存在が個人を指導するうえで効果的だ（共同活動）→ものの意味に対する反応を含む（知的行為）⇔物理的刺激

統制の基本手段は、知的なものである。他人から直接的に働きかけられるものではなく、物を使う点から、ものを理解する。これが社会統制の方法だ。

担当：青山

3．Imitation and Social Psychology 模倣と社会心理学

◆社会心理学とは、模倣という概念に基づいて生まれたものである。個々人の社会統制というのは他者の行動を模倣しようとする人間の本能的原理に基づいており、この説における模倣は、人々が同様の方法で何かをしている状況を指すのではなく社会集団を形成しているもの同士が同じ状況において、行動を決める観念や意図を共有するがゆえに成されているという前提がある。

◆模倣は相手の行ったこととこれから行うことを考慮し自分の行動に反映させることであり、起こしたい行動の手段を模倣するだけで安易に目的やするべきことを模倣しているのではない。達成を図るための手段を模倣することには注意深い観察と、達成可能性の高い方法を選び取る際の賢明さが不可欠であり、正しい意味での社会統制は、模倣を通して一つの意識や方向性が集団のなかに見いだされることで機能する。

4．Some Application to Education 教育への適用

◆我々の生きる文明社会が辿ってきた道というのは、数多くの自然物が行動の機動力となり、目的を果たすための手段になることで成り立ってきた。それは、文明人が自身の能力を喚起させ、未開人とは異なる優れた刺激の中において指導されていく過程を経ている。

我々の生活の中の事物は全て人間特有の活動において無関係であった物が好条件なものへと変化したもので、これらを先人が苦労して得てきた、その総体と言える。

◆我々が過去の経験の数々に触れることができるのは言語を通してである。しかし、言語が実際に学校で用いられれば単なる教育を施す上の手段や道具になりがちであり、言語を使用することで協力的で連帯感を伴う活動の充実が学校現場には求められている。ここでいわれる連帯感を伴う活動とは、複数の生徒が先人のもたらした能力や手段を使うプロセスが関連付けられていることが求められる。

**論点**

For when the schools depart from the educational conditions effective in the out-of-school environment,（p.23）

（学校の外の環境において効力を持つ教育的諸条件から学校が乖離）しないことが大事

↓さもないと

they necessarily substitute a bookish, a pseudo-intellectual spirit for a social spirit.（p.23）

（学校は書物的な、疑似の知的精神をもってくることになる）

↓回避するために、

For the school “these things “mean equipment with the instrumentalities of cooperative or joint activity.（p.23）

（学校は協力的すなわち連帯的な活動の手段を用意しておくこと）が必要

↓

Not that the use of language as an educational resource should lessen; but that its use should be more vital and fruitful by having its normal connection with shared activities.（p.23）

（共同の活動と関連付けることによって、言語の使用はもっと生き生きとした実り豊かなもの）となる

共同の活動と関連付けられることによって、生き生きとした実り豊かなものとなる言語の使用とはどのようなものか？

また、もしデューイに反対し、共同の活動と関連付けられても、言語の使用は生き生きとしないし、実り豊かなものにならないと思うのであれば、その理由はなぜか？

班でも、デューイがいう「言語の使用」が具体的にどのようなものかについて議論しましたが、私たちでは結論がでなかったため、みんなで話しあってみたく思い論点としました。

参考文献

J.デューイ著松野安男訳『民主主義と教育（上）』岩波文庫、1975．